

南部文学の反抗娘

——ウェルティと正調南部文学——

越 智 博 美

序

The Optimist's Daughter (『楽天主義者の娘』) (1972)⁽¹⁾ は、作者ウェルティ曰く、「かなりの部分が母にまつわる記憶」⁽²⁾ という、亡くしたばかりの作者の母の思い出を取り込んだ自伝的要素の色濃い中編である⁽³⁾。執筆当時と同じ1960年代後半を舞台とするこの物語は、楽天主義者の娘ローレル・マッケルヴァ・ハンド (Laurel McKelva Hand) の視点から語られる。この世を去ってもなお娘ローレルの中で神話的存在として君臨する母ベッキー (Becky) と死の床に横たわる南部紳士の父 (= 楽天主義者) マッケルヴァ判事 (Judge McKelva) とを巡って、判事のヒステリックな後妻のワンダ・フェイ (Wanda Fay) との見方が対立、最終的にローレルの方が自分の記憶を修正し、過去と折り合いをつけて生まれ故郷のマウント・セイラス (Mount Salus) を後にする。

この終結に向かって、テキストの中では種々のモチーフ群が創り出すイメージが絡み合い、層をなす⁽⁴⁾。まず、「見る、見える／見えない」を巡る一連の象徴群が張り巡らされる⁽⁵⁾。加えて、「水」のモチーフが「見える／見えない」と微妙に関わりつつ差し込まれる⁽⁶⁾。滝の詩、水中にあるような父の身体、筏下りのエピソード、川の合流、記憶の泉など、その多彩なこと、まるで、象徴事典の例示項目を見るように多岐にわたっている。実際象徴辞典をあたれば、それぞれ「生と死の間」、「死」、「生」、「再生」等場面に相応しい意味をそこに見いだすことができるだろう⁽⁷⁾。「手」のモチーフもコミュニケーション、及び、ものを作ったり人を癒す「能力」を巡って使われる⁽⁸⁾。さらに鳥、神話のモチーフまでもが加わって「よくできた壺」のごときテキストは、そのイメージのネットワークを「読み解く」ことを迫るかのようである。しかし、これらの象徴群の多彩な意味は、物語のテーマに向けて整合性をもって収束するというよりは登場人物同士の認識の衝突によって、むしろその意味を奪われ、転覆され、拡散

する。滅び行く白人紳士階級の擁護者ローレルの紡ぐ父とその妻だった母の物語は、勢力を増す貧乏白人階級代表のフェイ、及び実家のチザム (Chisom) 一家の認識と衝突——一見フォークナーの世界を思わせる対立である——して綻び、引き裂かれる。

ところが、この「記憶」の世界は公民権運動、ヴェトナム戦争、北部資本の流入という 60 年代南部を揺るがした社会事象をすべて捨象したところに存在しているかの観があり、それ故にか、この作品を分析する場合、孤立した「文学宇宙」⁽⁹⁾を求めるごとく、イメージや神話分析を中心に、フェイとローレルが象徴する文化や世代の違いや過去に対する認識の違い、あるいは母と娘⁽¹⁰⁾といったテーマに迫るという方法が多いように思われる。

しかし、滅び行く古い過去を描いたとして南部文学の正典のひとつとされるこの作品を、それが排除している混沌たる社会背景の中に、さらには南部文学批評史の中に差し戻してみたときに見えてくるのは、その裂け目から他ならぬ同時代が顔をのぞかせ、そのことが南部文学および南部文学批評の正典に逆らう身ぶりを示すという剣呑な図式である。

I. 並置・転覆／物語作家の失墜

過去は始めから完全な形でローレルの中にある。シカゴに暮らしていたローレルにとっては、10 年前に死んだ母と、判事を引退して故郷に暮らす父はすでに神話的人物にまで高められていた。父はマウント・セイラスの市長を務めていたこともあり、任期中には洪水を治め、学校の創設に力を尽くし、ブラスバンドの子供のためにユニフォームを買ってやり……と社会のために働く人であった。貧しいコートランド (Courtland) 青年が医師になれるよう金銭の援助も惜しまぬ、まこと地域の誇りといった人物である。また、母は、もと教師だが、知性だけでなく、美しい庭を造り、美味しいパンを焼く「手」をも供えた生気溢れる人物だった。父母は完全に調和した夫婦で、ローレルの幼い頃には、ディケンズの本を朗読し合う 2 人の声が屋敷に響いていた。「完全な夫婦としての父母」、「短かったがやはり完璧だったフィル (Philip) との結婚生活」の思い出は、彼女の心の中で、整然と織られた世にも美しいテキストとして、「娘」、「妻」としてのアイデンティティを支えてもいる。

眼病に倒れた父の看病にシカゴから駆けつけ、ニュー・オーリンズの病院で後妻のフェイとともに看病をし、死を看取り、故郷に帰って葬式を終えるはぼ一月の間に、とりわけ「父母についての物語・解釈＝過去を再確認する物語」は、他人のそれと衝

突し、その意味内容の転覆を余儀なくされていく。これは、自分の現在を規定するものとしての過去が綻び、引き裂け、断片化していく過程でもあるが、その末にローレルが辿りつくのは「過去は傷つくもの」であり、また「傷つくからこそ、それは心の中に生きているものだ」(179) という認識である。

ウェルティは語りの視点人物でもあるローレルにフェイ、チザム家、共同体の人々などの異なる認識枠を並置するという図式を繰り返し使って、解釈者ローレルの権威をなし崩しにすると同時に読者の解釈行為をも無化していく。というのも、読者の認識もローレルの視点に限定されているからである。

異なる認識枠の代表はフェイのそれである。ローレルの誇る美しいテキストが最初の綻びを見せるのは、父を看病するニューオーリンズ——平生の秩序を転覆させるカーニヴァル、マルディ・グラたけなわの頃——である。ここでは、医者「手」が有能さを示す比喻を幾重にも纏っている。医者「人を癒す有能な手」はローレルと握手し(3)、「時計に触れただけで時間を感じでき」るかのようで(4)、判事も「よい手」(11)にかかると全幅の信頼を寄せる。町の「模範」(11)たる判事の「判断」に後押しされて、ローレル／読者／解釈者は医者「手」の有能さの印と読み解く。

一方フェイは疑いの言葉——「手術前にどこまでよくなるかを知らせてもらわなくては」(8)「自然に任せた方がいいわよ」(10)、「あの医者はそこまで立派じゃない」(12)など——を差し挟むのだが、その言葉はマスター・コードの担い手ローレルの解釈を邪魔する雑音でしかない。というのも、フェイは冒頭から、やはり「並置」という戦略で、その言葉に権威を与えない仕掛けを施されているからである。40代半ばを過ぎたローレルと並んで登場した40代に入ったばかりのフェイは、ローレルと比べるといかにも貧相で、服の趣味も悪く、医者にも握手を求められない。目を悪くした原因について判事が自らの判断を話すと、バカにしたように、「カケスのごとく甲高い声で」(5)笑う浅薄な面を見せ、ローレルがファブリックデザイナーとして「創造的」なキャリアを積む一方、「何もしない手」(26)を持つ結婚前のフェイの職業は、タイピストという人の言葉をただ写すという創造とはほど遠いもの、といった具合に権威を持つものと並置され、その価値を奪われている。

しかし、術後の経過は、医師の努力とは裏腹に悪化の途を辿る。ローレル／読者の思惑を裏切って「手」の意味は曖昧さを帯び始め、判事が死亡するに至っては、それまで、ローレル／読者の権威ある解釈を邪魔する浅薄な雑音でしかなかったフェイの疑いの言葉の方がむしろ「事実」に忠実なものとなる。医師に対するフェイの捨てぜりふ「どうも。何もしてくれなかったわね。("Thank you for nothing")」(43)は、

医師の「手」に付随していた「有能」さを無化、ローレルによる解釈の権威を損ねる。「手」はもはや「有能さ」の記号ではない、単なる手に帰する。

マウント・セイラスの人々との間にも「判事」の解釈を巡ってずれが生ずる。ここでもまずフェイの考え方とローレルの考え方が並置され、後者に軍配が上がるかに見えて、それが覆される。フェイを起こそうとベッキーが生前使っていた部屋に足を踏み入れたローレルはその変わり様に息をのむ。母の書き物机に替わって大きなベッドが場所を占め、ベッドもカーテンも何もかもがピンクのサテンという趣味の悪さなのである。この「馬鹿げたピンク」(62)は、*The Ponder Heart* (1954) で判事と同じく神話化されるダニエル・ボンダーが娶った、消費社会の権化のような物言わぬ年若い嫁ボニー・ディー (Bonnie Dee) の服装に通じるものである。そして、その「馬鹿げたピンク」は判事の棺を侵犯し、判事の顔までもピンクに染める。棺の蓋を閉めるように言うローレルに対し、いつもはフェイに対抗してローレルの味方をしてくれる友人テニスン (Miss Tennyson) も、棺の蓋を開けるようにと言うフェイの意見に同調する。判事はローレルの「父」であるだけではない。フェイの夫でもあり、もと市長として公人でもあるというのである。さらに、テニスンらは判事がベッキーの棺の蓋を閉めた過去のできごとを持ち出して、判事の非難に及び、あまつさえ「俗物 ("pretty worldly old sweet")」(126) 扱いさえするのである。こうして、ひとつの解釈を行っても別の解釈でそれが相対化されるということが繰り返され、ローレル作の父親物語は、「正典」としての位置からずり落ちていく。

このような並置・転覆の過程が繰り返されるたびに、マスター・コードの使用としてのローレルの立場はぐらつき、判事の物語は神話の体裁をなさなくなる。「みんな間違ってる ("They are misrepresenting him")」(83) との思いも虚しく、完全な人格者ではない、弱い面も持つ普通の人としての判事が像を結んでゆく。解釈に頼り行動に見放されている娘ローレルの、判事はまさに父であった。父の「楽天主義」とは、実は、母との意見衝突を回避するという「事勿れ主義」の謂いであったことをローレルは理解、というよりは、思い出す。母の病状は絶望的だった。しかし、判事は事実を知りたいと願う母に知らせぬばかりか、自分でもその絶望的な展望を認めない。さらに、絶望に苛まされているという「前向きな」母の負の面を認識することも拒む。父の「楽観主義」は、認識の「ご都合主義」だったのである。さらに彼女はそのことが母を一層の絶望と怒りに駆り立て、2人が不協和音を奏でていたのだということも「思い出す」が、それらはローレルの紡いだ神話自体が「楽天主義」によって編まれたものに過ぎないという事実をも明らみに出す。判事は、南部紳士の鏡という高みから、

フェイの家族の言葉を借りれば、「普通の人 (“plain folks”）」(96) に、紳士階級から民衆／貧乏白人階級レベルへ、象徴の衣を剥がれた生身の人間へと、引き降ろされる。「楽天主義」の新たな展望は、ローレル自身と彼女が紡ぐ物語をも引き裂くのである。

この時「嘘つき」なフェイの言葉はある種の真実の重みを持って迫り始める。身内が一人もいないと言ってはばからなかったフェイにはピックアップトラックに乗って葬式に駆けつける貧乏白人階級の大家族がいた。「嘘ついたわね」(99) というローレルの非難にフェイは「いいじゃない……ここで聞いた嘘よりはマシよ」(99) と応えるが、「ここで聞いた嘘」が指すものは主に「判事を巡る話」——ローレル及び近隣の人々による判事の理想化——である。となると「判事の理想的解釈」は、自称「偽善者ではない」フェイ流に言えば「偽善的なでっち上げ行為」でしかない。

フェイにとっての「真実」は身も蓋もない現実それ自体として、物語／解釈行為をはねつける。フェイとローレルの最後の対決は、ローレルに最終的に過去が現在の助けにはならないという認識を持たせる決定的な場面である⁽¹¹⁾。

フィルが作り、母が使ったパンこね板を胡桃割りに使って傷つけたフェイに、ローレルは怒鳴るがフェイには理解できない。

“I don’t know what you’re making such a big fuss over. What do you see in *that thing*?” asked Fay. “*The whole story, Fay. The whole solid past,*” said Laurel. “Whose story? Whose past? Not mine,” said Fay. “The past isn’t a thing to me. I belong to the future, didn’t know that?”... “I know you aren’t anything to the past,” [Laurel] said. “You can’t do anything to it now.” And neither am I: and neither can I, she thought, although it has been everything and done everything to me, everything for me... The past is like him [her father], impervious, and can never be awakened. It is memory that is the somnambulist. [emphasis added] (178-79)

確かに、フェイの言う通りパンこね板は「モノ」に過ぎず、その「モノ」に象徴的な意味を込めたところで、それが「確固たる過去」として今の自分に何かをしてくれるものではない。むしろ、それは心の内に「記憶」という形で、更新・保存を続けるものであり、その限りでは、もはや形見のような「モノ」自体は必要ではない。だからこそ、ローレルは父母の記憶にまつわる物をすべて捨てて、シカゴへ戻っていきるのである。この時、ローレルにとっては、苦渋に満ちた父母の姿も、理想的な姿とともに、彼女にとっての修正された「真実」である。

「何が真実か」、について、2人の認識の枠は共通点を持たない。ローレルは過去や物に対して意味を与え、解釈するが、フェイにとっては、過去は意味をなさず、物は

物にとどまり、象徴的な意味など持ち得ない。「モノ」を「モノ」としか見ないフェイが発する言葉は効率を問題とする。手術の成功可能性を尋ね、判事を助けられなかった医師の努力を「無」と判断し、ローレルの旧友は自分にとっては役にも立たないものとして退ける。

フェイは「叫ぶ」存在である⁽¹²⁾。医師とローレルのコミュニケーションを、判事の思いが昔に戻っていくのを、ベッキーの思い出話を、判事の安静を、アデル (Miss Adele) からローレルへの呼びかけを、甲高い笑いや叫びで引き裂いてしまう。フェイの叫びは沈黙のうちに解釈する視点人物ローレルの物語領域を侵犯するゲリラ的ノイズである。

これは、単に貧乏白人と南部の紳士階級といった、階級の対立や単純なジェネレーション・ギャップ (しかもフェイとローレルは10歳と離れていない) といったものでは説明できない。階級や世代の差であれば、それと認識できる、つまり、語り得るからである。ところが、物語の進行とともに逆にノイズとして権威を増す (マウント・セイラスの人にとっての) 「厄介者 (“a trial”)」 (112) フェイは、ローレルをして「予測 (“predict”)」 (52) 不可能と言わしめる。認識の枠からすり抜けるフェイはローレルの解釈コードでは解説不能な存在なのである。「語り得ない」という事態が語るものはいったいどうとらえればよいのか。

過去を持たず、その意味では家族も持たないフェイが唯一「自分の言葉 (“my language”)」 (96) の通じる相手と考える故郷テキサスの幼なじみは壊れた電化製品 (掃除機、モーター、バスルームのヒーターなど) に埋もれて隠遁生活を送る人物 (98) である。ノイズとしてのフェイは、ノイズを発するであろう壊れた電化製品と共鳴する人間となら、わかりあえると言わんばかりである。実際、寄せては返す波のように繰り返し現れ、物語を引き裂く彼女の「叫び=ノイズ」は、周りの人間よりはむしろマウント・セイラスに同じく波のように打ち寄せる「インターステート・ハイウェイ (州間高速道路)」の「ノイズ」のあり方とこそ響き合う。

II. コットンベルトからサンベルトへ

第2次大戦後の南部は、「ブルドーザー革命」による急激な社会・経済の変化を被り、1930年代、40年代の「他の地域に比べて、収入、教育レベルが低く、基本的に田舎で小さな町が殆どであり、農業中心の経済でそれ以外の産業に関わる人の割合も低い」⁽¹³⁾ 南部とは明らかに一線を画すこととなる。1970年代になって戦後を振り返っ

た歴史家に「産業化の推進こそがこの20年の中心課題だった」と言わしめる⁽¹⁴⁾ほど、南部は、州レベルから小都市に至るまでの政治・経済界、さらにはジャーナリズムまで巻き込んだ産業誘致活動を繰り広げた。知事自らがセールスマンとして他州へ出向いたこともあって⁽¹⁵⁾産業化が進み、1960年には農業従事者は人口のわずか10%になる。それとともに都市化も進み、1940年には田舎に住む人が65%だったのが逆に1960年には都市人口が58%と逆転した⁽¹⁶⁾。産業化を支えるものとして、交通網の整備もあった。マウント・セイラスに騒音を響かせる州間高速道路は共和党のアイゼンハワー大統領の主要な立法業績のひとつであり、1956年の州間高速道路法の制定とともに、めざましい勢いでアメリカを高速道路網でおおい始める⁽¹⁷⁾。さらに、鉄道料金も低下する。産業化、及び物流ネットワークの整備により、生活水準も北部に負けずに上がり、60年代のエアコン革命により、フォークナーの作品を覆う蒸し暑い南部は過去のものとなる。1970年代になると、このような南部は「コットンベルト」ではなく「サンベルト」と呼ばれ始めた⁽¹⁸⁾。さらに、マスメディアの発達も後押ししたこの時代の変化は、結局のところ、南部が地理的、精神的、社会的に孤立した状態を捨ててより大きなアメリカというシステムへ編入される過程でもあった⁽¹⁹⁾。

ウェルティが暮らすミシシッピ州ジャクソンもこの例外ではなかった。ミシシッピ州は、南部諸州の中でも後進性という点では抜きん出ており、1945年の時点で「コンゴのごとき荒れ地が広がり、その地の半ば野蛮な人間は洪水を避けて樹上生活を送っている」⁽²⁰⁾とまで言われる有り様であった。それだけに、戦後の産業化には州を挙げて取り組み、1964年には、北部ジャーナリズムに対して発信した州の宣伝にかけた費用は全米第3位、1967年の知事選では、現職を含めた知事候補が一堂に会して企業と開発の密約を交わし、1969年にはジャクソンの聖職者3人がゼネラル・モーターズの役員と会談、同社の誘致を打診するといった具合であった⁽²¹⁾。官民、どころか宗教界までもがこぞって産業化の旗振りをしていたのである。招致の対象は産業だけでなく、軍事基地も含み、冷戦時代を支える軍勢力は南部産と言ってもよいほどであった。

さらに、1950年代半ば以降盛り上がりを見せる公民権運動にも当然巻き込まれている。1954年に連邦最高裁が下した、公共の場での人種分離を違憲とする歴史的判決（ブラウン判決）に対して、1956年3月には、ミシシッピ州も含む南部諸州の連邦議員100人が最高裁の判決を違憲とする声明を発表するなどの反発を示す。ところが、ミシシッピ州全体の対応は一樣ではなく、人種統合に反対しつつも、経済の発展を促進して貧困から脱出することを第一に考え、北部からの産業誘致のためにも人種統合はやむを得ないという態度を取ろうという層も多くを占めていた⁽²²⁾。実際ジャクソン

では「新ホイッグ」と呼ばれる共和党寄りのビジネス界の進歩派が人種分離廃止に積極的に関わっていた⁽²³⁾。すでに、1952年の大統領選挙では、南部の民主党員が大挙して強力な経済路線を敷く共和党アイゼンハワー支持に流れるというかつてない現象(“Democrats for Eisenhower”)⁽²⁴⁾が起こり、ウェルティが強力に応援していた民主党リベラルのスティーヴンソンが破れるという事態が起こっていたが、「ソリッド・サウス (“Solid South”)」と呼ばれた民主党保守主義の一枚岩的な状況は、農本主義ともどもウェルティのまさに目の前で、崩壊し、多様性を見せつつあったのである。

III. 売れ残りの田舎町とインターステート

このような文脈に照らして見たとき、マウント・セイラスは南部セールスの売れ残りと言っているほど旧態依然としており、奇怪なほどに「第2次大戦前の南部」的である。ローレルの夫が第2次大戦で死亡したことやローレルの年齢などを考え合わせると実際の執筆時(1967年)に近い時代設定と考えてよいにもかかわらず、物語は60年代を彩る様々な事件——産業化、公民権運動、さらにはヴェトナム戦争——を総て排除したところに成立しているかの観がある。この異様さは、例えばウェルティより1年早く(1908)生まれた同郷の作家リチャード・ライト(Richard Wright)を思い起こせば十分だろう。しかも、マウント・セイラスの人々は、判事、隣の女性教師、退役軍人、主婦などの中流階級の人々を中心に描かれ、「産業化」に直に取り込まれた貧困な農民層ではない。ことに、「高貴なローマ人」(72)にたとえられる公人としての判事の姿は、第2次大戦前のプランター階級が理想として掲げた、ストア派の父権的な規範に沿った紳士像そのものである。しかも「判事」という、法律に関わる職業は理想的な職業のひとつでもあった⁽²⁵⁾。また、中流階級ではないメンバーも、便利屋、盲目の調律師など、産業化される以前の南部の中で機能する職業に就いている。町の景観も古い町のそれである。雨の夜、ローレルの目に入るのは、広場、時計台つきの郡役場の建物、公園の南北戦争記念の彫像という、ヨクナパトゥファ郡ジェファソンを思い起こさせる田舎町である。そこには、新しく誘致した工場などの姿は見えない。

町の人々の共有する文化も同様である。男性は釣りや狩猟クラブ、女性はガーデニング・クラブといったクラブで親睦を図る。ローレルの家の書斎に並ぶのは「いつでも一番人気のある」シェークスピア、ディケンズ、聖書、さらに、南部で絶大な人気を誇った『ポンペイ最後の日』などである⁽²⁶⁾。母が大切にしていた『マクガフィー読

本 (*McGuffey Reader*)』は、初等～中等教育の教科書で、19世紀後半から20世紀前半にかけてどちらかと言えば東北部よりは中西部及び南部で絶大な人気を誇った教科書である⁽²⁷⁾。1960年代後半を舞台にしながらも、「農村部の変化」、「人種の軋轢」といった、「同時代の事象」を「完全に」抜いて⁽²⁸⁾その中に意図的に作られたマウント・セイラスおよびその地に生きた判事をめぐる物語は、まさに「現在の中の過去 (“the past in the present”)」であり、さらにそこにスノーブス家のごとき俗物チザム家が侵入する図式は「フォークナー的」でさえある。その限りにおいて、ウェルティは、新批評の旗振り役、アレン・テイトが唱道した南部文学の王道——「現在の中の過去を意識する文学」——を歩んでいるかのようであり、実際その正典へ取り込まれていく⁽²⁹⁾。

この周到に構築された「堅固な (solid)」過去にはあからさまな60年代的事件は描かれていないかもしれない。それでもなお、「60年代」は確かに作品に潜り込み、繰り返し顔をのぞかせ、「堅固な過去」に亀裂を生じさせている。そのひとつは産業化の波である。インターステートの騒音は、蠅のようにうなり (57) 波のように押し寄せ、葬式の音楽をかき消してゆく (92)。南部ならではのヴァージニア・ハムは、今や「リッツ・クラッカー」という国民食にのせて供される⁽³⁰⁾。家族の形態も変化している。ローレルから上の年代は「過去」の習慣を堅持しているが、若い人々は、親と別居して「新しい地区」に家を構えるという全国的な傾向に従っている⁽³¹⁾。隣の家の子はガールフレンドと出かける方を選んで判事の葬式という共同体の儀式には参加しない。別の子供は教育水準の上昇を反映して大学に進み、家にいない (123)。このように家族のつながりを重視しない傾向は、フェイに限ったことではなく、マウント・セイラスにも及んでいるのである。ローレルの母の故郷、ウェスト・ヴァージニアの親戚も同様に、母の甥や姪の世代は、都会へ出て銀行員を始めとする職に就き、連絡も途絶えてしまった (152)。さらにチザム家も例外ではない。フェイの甥にあたる子供は、祖母 (=フェイの母) が夫を亡くしたときに息子 (すでに自殺) に語った「あんたがこの家の長だからね」 (76) という言葉を聞かされると、泣いて走り去り、家族の重みを担うことはできない。

家族の形態の変化まで、考慮に入れたとき、「新興の貧乏白人対旧紳士階級」というフォークナー的テーマは、もはや成立しない。作品中の60年代的要素は、テキサス (チザム家)、ウェスト・ヴァージニア、ミシシッピ、どこにもあてはまる全米的な現象として「南部的」作品世界それ自体を揺るがしている。そして、フェイは、「全米的な新しい現象」を体現する人物なのである。これまでに見てきた彼女の性質は、いわゆる

南部的とされていた、そして、ローレルを含むマウント・セイラスの、さらに俗物ではあるがチザム家の古い世代の人々の「呑気、寛大、信仰心がある、保守的」という性質のままで反対である。フェイは「欲が深く、即物的、進歩的で効率を好む」。これは、1960年代頃まで南部の人々には北部の産業化された人間の性質、また、全国的にはアメリカ人の性質とみなされてきたものでもある⁽³²⁾。とすれば、「予測不能なフェイ」とは、産業化され、標準化されたアメリカの性質を担った女、社会構造がポストモダンへの社会へと変化するただ中であって、古い社会・文化の認識の枠からはみ出る存在、新しい社会構造の申し子——「手」の労働など不要な、従って「手」の意味に「有能さ」を担わせなくてもよいような産業化社会に生きる女である。まさにそれゆえにローレルの認識の枠と言葉からはみ出し、1950年代以前に基盤を置くローレルの解釈コードでは、もはや把握できないノイズなのだ。また、把握できないということ自体が、1950年代以前の社会とは違う新しい存在形態の出現という状況をも語っているのである。

この時点で作品は「現在の中の過去」から一転、「過去の中の現在」という様相を見せ、タイトの「王道」の中にありながら、鬼子のごとく異質なものであるとして振る舞い始める。

IV. 「正統な南部文学」

このような歴史と現実の多様性の表象は、「正調南部文学」を幾重にも裏切る行為である。「南部文学」をアメリカ文学の主流に乗せようとした『フュージティヴ』誌／新批評グループの面々は、政治的には、農本主義を掲げる南部民主党の保守派、つまり、「ソリッド・サウス」の担い手として、南部の伝統、習慣、価値観を「堅固な過去」として死守しようと努めた。「現在の中の過去」を引っ提げて「南部ルネッサンス」及び新批評を牽引した彼らにとっては、フォークナーこそが、並びなき天才としてその中心であり、頂上をなしていた。

南部文学を批評する際も同様である。「現在の中の過去」の父祖たるフォークナーを物差しとして、それ以前、それ以後の作品を整然と並べれば『南部文学史』はできあがる。絶対の基準をなす「現在の中の過去」たる南部は、「歴史的なこと」を下敷きとしながらも、「神話、普遍的」な「超越論的真実」へと格上げされた南部、「歴史」のように見えながら実際の「歴史にも、政治、イデオロギー、人種、階級、ジェンダー」といったいかなる要因にも左右されない神聖なる「アイコン」としての「南部」で

あった⁽³³⁾。そのような古い「合意 (“consensus”）」⁽³⁴⁾は、1980年代になっても衰えることを知らず、南部文学史の古典、スタンダードになるべくして出た『南部文学史 (*The History of Southern Literature*)』(1985)として結実する⁽³⁵⁾。もちろん、テイトが最重要の人物としてまつられていることは言うまでもない。

当然のことながら、「合意」に逆らうものを、「沈黙させ、黙殺する」⁽³⁶⁾南部文学／史、及びその批評／史はまた、保守的な白人の男性による文学／史でもあった⁽³⁷⁾。アメリカの主流文学を論じたレスリー・A・フィードラーは、南部文学を語る際、新批評家の流れを受けて、K. A. ポーター、C. マッカラズ、F. オコナー、ウェルティらを「第2のフォークナーの系列…女流フォークナー派」と称して女性作家の作品を下位区分に位置づける⁽³⁸⁾。こと南部文学に関しては、このような批評の流れは1980年代にはいっても「政治的に正しい」などという基準には目もくれずに、上記女性作家達を主流からはずし続けるが、それは偏に件の「合意」に沿わぬ部分によるものであった。「彼女たちはもっと大きな文化、人種、政治のテーマを…扱わない…[南部という] 地域を想像的ヴィジョンの中心に据えなかった」⁽³⁹⁾というのである。とはいえ、女性作家の作品でも「合意」に沿って「現在の中の過去」たる「南部」を描いていると見なされれば見事主流の名作となるわけで、*The Optimist's Daughter* もそのような数少ない例のひとつとして主流文学の中に位置づけられてきた⁽⁴⁰⁾。

正典の南部文学史が「黙殺」の対象とするものは、「女」だけではない。文学作品を特権化し、「南部ルネッサンス」から小説と詩以外を排除して世俗を離脱しているかに見える新批評家は、実は南部民主党保守主義の立場に立つ農本主義者で、民主党リベラルを黙殺しようとする右翼でもあった⁽⁴¹⁾。リベラルな立場の女性作家の手になる⁽⁴²⁾*The Optimist's Daughter* はこのような伝統に対し、とりわけ比べられることが多く、「山」のように立ちこだる先人フォークナーの作品を思わせる南部の田舎町を設定、南部文学の規範にのっとったそぶりを見せつつ微妙にその規範からずれて、それを書き換え⁽⁴³⁾、南部文学の正典形成の基準、「現在の中の過去」、「神話化された堅固な過去」をそれぞれつき崩す。

ウェルティは、新しい時代の幕開けを感じ取り、南部の断片化、言い換えれば、多様化を意識していた⁽⁴⁴⁾。新しい社会構造とその中の存在という「より大きな社会の状況」を、「語り得ないもの」としてではあれ、取り込んだことで、*The Optimist's Daughter* が表面上見せている「現在の中の過去」は「過去の中の現在」に反転するが、これは過去の遺物のごとき南部に芽吹く新しい現実の存在を、すなわち、サンベルトの時代に入った南部の異種混合性を、とどのつまりは「堅固な南部」の崩壊を意

味している。そして、このことは、異物の入らない「過去」を現在に作りだすことなどではしない、時代が変わった以上は「現在の中の過去」という文学世界はもはや構築不可能だという宣言としても機能する。

また、過去それ自体も、「堅固な過去」どころではない。ローレルは、即物的なフェイを選んでしまうような父の「普通の俗物」としての半面を発見し、受容することで、「過去」を修正するが、それは、過去の多様性を認めることでもある。南部文学の伝統的紳士からずり落ちる判事の姿⁽⁴⁵⁾、パンこね板という「モノ」それ自体を「過去そのもの（“whole solid past”）」（178-79）とするローレルの姿は正典南部文学および、南部文学批評家のパロディとして読むことも可能だが、ローレル自身がそのような姿勢を捨てた時点で、「神話化された堅固な過去」は修正され、傷を受ける「記憶」に変質して消え去ってしまう。もはや、集団が共有する神話としての過去はなく、あるとすれば、極めて個人的な「記憶」としての過去である。

妻（＝南部）についての記憶を選択、編集して都合よく神話化する「楽天主義」（＝正典南部文学／批評家）の判事を父に持つ「娘」は、この時点で「楽天主義」と「神話」を脱ぎ捨て、「個人的な記憶」としての「南部」を胸にシカゴへ旅立つ。そのような記憶は、その持ち主に南部を「憎んじやいない」と言わせて自殺に追い込むような類のものではもはやない。

結

American Literature 誌では、1985年から翌年にかけて、「排除し、沈黙を強いる」文学史の正典のあり方に疑問を突きつけた Annette Kolodny の問題提起を受けて、修正版アメリカ文学史の *Columbia Literary History of the United States* (1988) を編集中の Emory Elliott, Sacvan Bercovitch など巻き込んだ議論が誌上を賑わした。その最中に、堂々たる「正典」として登場した *The History of Southern Literature* (1985) の旧態依然のイデオロギー性を反省する南部文学研究家 M. クレイリング (Kreyling) の論文が、1985年の議論に応える形で *American Literature* に載るのは、ようやくその3年後である⁽⁴⁵⁾。そのはるか以前に、「個人的な」物語として規格はずれな面を持ちながらも「現在の中の過去」を描いたとして「正典」に取り込まれた作品 *The Optimist's Daughter* は、正典の内側から、その無化を試みる。*The Ponder Heart* (1954) が共和党的経済政策の行き着く先として想定される状況に批判を加えたのに続いて、*The Optimist's Daughter* は、文学右翼による「正典南部文学」という

イデオロギー装置に立ち向かっている。正統的南部文学に対してリベラルな「非合意（“Dissensus”）」の表明を行うこの作品は、まさに南部文学史の異種——ノイズ——として存在しているのである。

注

1. Eudora Welty, *The Optimist's Daughter* (N. Y.: Random House, 1972). 以下、この作品からの引用は本文中の（ ）の中にページ数を記す。
2. Peggy Whitman Prenshaw ed., *Conversations with Eudora Welty* (Jackson: University Press of Mississippi, 1984), pp. 215-16 Jan Nordby Gretlund との対談（1978）中の発言。
3. Eudora Welty, *One Writer's Beginnings* (Cambridge: Harvard University Press, 1984) 参照。前年にハーヴァード大学で行われた講演をもとにした自伝的エッセイ。亡き両親に捧げられたものである。特に1966年に亡くなった母にまつわるエピソードはそのまま *The Optimist's Daughter* に取り込まれたものが多い。
4. この作品中の神話的アーキタイプの分析については、ソーントン不破直子、『ユードラ・ウェルティの世界——饒舌と沈黙の神話——』（こびあん書房、1988）、230-47頁。Gail M. Mortimer, “Image and Myth in Eudora Welty's *The Optimist's Daughter*,” *American Literature*, 62, No. 4 (1990), pp. 617-33 参照。
5. 例えば、「見る、見える／見えない」を巡る一連の象徴群は、父の網膜剥離、入院先で同室だった眼の见えない患者ダルゼル氏（Mr. Dalzell）、母の白内障、マウント・セイラスの盲目のピアノ調律師トム・ファリス（Tom Farris）といった設定から、言葉のレベルでは“see,” “eye,” “look,” といった見えることに関する動詞、そのような動詞による認識を危うくする“blaze,” “dazzle,” “brightness” といった光を表す表現に至るまで微細に張り巡らされている。
6. 白内障（cataracts）を患い死の床に横たわるベッキーは娘ローレルに、自分の少女時代のお気に入りの詩——Southey の“The Cataract of Lodore”——を読ませるが、視界を遮り、迸る大滝の水とともに、母は逝く。同じく死を控えた父の身体も「暗い、流れる水面下にその頭を沈めているかのよう」（33）だった。また、少女時代のベッキーは勇敢にも病身の父を筏に載せて川下りをするが手遅れだった。なるほど、「流れる水」は、時の流れにも似て総てを回復不可能なところに押し流す。と同時に豊かに合流するミシシッピ川とオハイオ川は新婚のローレルとフィルの2つの人生の交わりをも象徴する。2つの川が合流するように父母の認識に欠けていた反面、つまり調和に満ちた「完璧」な関係ではなかったという事実認識を記憶に加える時、ローレルの「胸の奥の泉が蓋を開け、再び流れ出す」（154）。
7. アド・ド・フリース、『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、1984）、678-79頁。
8. 故郷マウント・セイラスのローレルの旧知の面々はゲマインシャフト的共同体を構成し、手を使った言葉の要らぬコミュニケーションを頻繁に行う。「握手」し、「抱き合い」、「手を握り合い」、親愛の情、あるいは信頼感、安心感を伝え合う。「手」は「有能さ」をも意味し、ローレルを始め、亡夫ハンド氏（建築家）ベッキー、コートランド医師らはものを

- 作る「手の才能」を持ち合わせ (175), 「手を使うことが何もできない」 (106) フェイは料理どころか卵を割れるかどうかとも怪しく (107), ベッドメイキングも苦手である (106)。
9. ノースロップ・フライ, 『批評の解剖』, 海老根宏ほか・訳 (法政大学出版局, 1980)
 10. Louise Westling, *Sacred Groves and Ravaged Gardens: The Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O'Connor* (Athens: The University of Georgia Press, 1985), pp. 54-55, 103-09. Westling は, 著作で取り上げた女性作家がそれぞれ母親の人生を反復するのを拒んだ経緯を述べている。また, E. Evans はローレルの母ベッキーの話がローレルにとっての超えられない壁となっていることを指摘しつつウェルティの作品における「孝行娘」を論じている。Elizabeth Evans, "Eudora Welty and the Dutiful Daughter," in *Eudora Welty: The Eye of the Story*, ed., Dawn Trouard (The Kent State University Press, 1989), pp. 56-68.
 11. ここで示されるのはローレルが「娘」という過去に縛られたアイデンティティから解放される瞬間でもある。Louise Westling の前掲書参照。
 12. 第1部だけでも"scream" (32, 40, 43), "cry" (28, 41, 42, 44), "exclaim" (15) などの「叫ぶ」が用いられている。"say" などの普通の動詞が使われる場合でも, 直接話法の最後にエクスクラメーションマークが頻繁につく。
 13. John Shelton Reed, *My Tears Spoiled My Aim: And Other Reflections on Southern Culture* (Columbia: University of Missouri Press, 1993), p. 58.
 14. Dewey W. Grantham, *The South in Modern America: The Region at Odds* (N. Y.: Harper Collins, 1994), p. 265.
 15. James C. Cobb, *The Selling of the South: The Southern Crusade for Industrial Development, 1936-1990, second edition* (Urbana: University of Illinois Press, 1993), p. 74. 1950年代末から60年代にかけては知事を始めとして, 各地の市長も産業誘致に奔走していた。
 16. Grantham, p. 195.
 17. M. K. Cayton, E. J. Gorn, P. W. Williams eds., *Encyclopedia of American Social History*, 3 vols (N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1993), p. 207. 政府は, 続く13年間で320億ドルという巨費を投じた。
 18. Bruce J. Schulman, *From Cotton Belt to Sunbelt: Federal Policy, Economic Development, and the Transformation of the South, 1938-1980* (N. Y.: Oxford University Press, 1991), pp. 219-21.
 19. Grantham, p. 259.
 20. Cobb, p. 93.
 21. *ibid.*, pp. 71-95.
 22. *The New York Times*, 1956. 3. 13. Tues. 同紙はこの日の1面で, 前日の南部議員の反対声明を伝え, さらに人種統合に対する南部の取り組み具合, 反発具合を州ごとに調査した結果を載せた数頁に及ぶ大特集を組んでいる。
 23. Grantham, pp. 269-73.
 24. John B. Boles, *The South Through Time: A History of an American Region*

- (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, 1995), pp. 494-95.
25. Jan Nordby Gretlund, *Eudora Welty's Aesthetics of Place* (Newark: University of Delaware Press, 1994), pp. 292-93.
 26. James D. Hart, *The Popular Book: A History of America's Literary Taste* (Berkeley: University of California Press, 1950), pp. 287, 78.
 27. Joel Spring, *The American School, 1642-1900* (Longman, 1990), p. 144. このテキストの発行部数は1871~1890年はおよそ6000万部、1891~1920年の間におよそ1500万部である。
 28. Reynolds Price, "The Onlooker, Smiling: An Early Reading of *The Optimist's Daughter*," in *Eudora Welty*, ed., Harold Bloom, *Modern Critical Views* (N. Y.: Chelsea House, 1986), p. 87.
 29. Allen Tate, "The New Provincialism" (1945), quoted in Louis D. Rubin Jr., Lewis P. Simpson, Thomas Daniel Young, et. al. eds., *The History of Southern Literature* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1985), p. 292.
 30. Reed, p. 49. リードは南部の国民食のひとつとして、各地の "country ham" を挙げている。
 31. *Encyclopedia of American History*, p. 207.
 32. Reed, p. 46.
 33. Michael Kreyling, "Southern Literature: Consensus and Dissensus," in *American Literature* 60. (1988), pp. 85-95.
 34. Kreyling, *ibid*, p. 84.
 35. 29に挙げたRubin, Simpson, Young, et. al., eds., *The History of Southern Literature* (1985)を指す。
 36. Annette Kolodny, "The Integrity of Memory: Creating a New Literary History of the United States," in *American Literature*, 57. (1985), pp. 291-307. この論文は、いわゆる「アメリカ文学史」のはらむ問題を扱ったもの。
 37. 南部文学批評が女性作家を周縁化してきた過程については、Will Brantley, *Feminine Sense in Southern Memoir: Smith, Glasgow, Welty, Hellman, Porter, and Hurston* (Jackson: University Press of Mississippi, 1993), pp. 3-37を参照のこと。
 38. レスリー・A・フィードラー, 『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一・井上謙治他・訳 (新潮社, 1989) 515-16頁。
 39. Richard King, *A Southern Renaissance: The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955* (N. Y.: Oxford University Press, 1980), pp. 8-9.
 40. Thomas Daniel Young, *The Past in the Present: A Thematic Study of Modern Southern Fiction* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), pp. 87-115. この著作はタイトルのみならず、エピグラフにまでタイトの言葉が引用されている。著者が取り上げる作品は、Faulknerの*The Unvanquished* (1938), R. P. Warrenの*All the King's Men* (1946), その他Walker Percy, John Barthで、女性作家の作品はウェルティの*The Optimist's Daughter*とFlannery O'Connorの*Complete Stories* (1971)だけで

ある。

41. 歴史、社会学等の文学以外の学問分野やリベラルを考慮に入れて南部ルネッサンスの再考を試みた著作に、Michael O'Brien, *Rethinking the South: Essays in Intellectual History* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1988). また、Blantley は黙殺された女性作家の多くがリベラルな立場をとっていたことを指摘している。Blantley, pp. 3-37.
42. ウェルティはニューディール政策への参加を始めとして、リベラルな立場に賛同を示している。1952 年の大統領選では民主党リベラルの Stevenson を応援し、本人曰く、「この上なく政治的」になっていた。このあたりの経緯については、拙著「ウェルティの“立場”——『ボンダー家の心』論」『言語文化』第 30 号 (1993) を参照のこと。
43. Carol S. Manning は、登場人物をフォークナー的人物のようにつつも微妙にずれて描いた点で、*The Optimist's Daughter* を南部文学の書き換えとしている。Carol S. Manning, *With Ears Opening Like Morning Glories: Eudora Welty and the Love of Storytelling* (Westport: Greenwood Press, 1985), pp. 163-87. ミシシッピ州に暮らすウェルティにとって、フォークナーは同郷であるがゆえに単なる尺度を超え、常に「山」のように立ちはだかっている。ウェルティは批評家のインタビューを受ける際も、必ずと言ってよいほど「フォークナー」について尋ねられている。対談集に収められた 1972 年の Linda Kuehl との対談でフォークナーを「山」にたとえ、1980 年の Jo Brans との対談ではフォークナーを尺度に自分の作品を見られることに対して苛立ちを示している。Peggy Whitman Prenshaw ed., *Conversations with Eudora Welty*, pp. 80, 303. また、同書巻末の索引を見ると、“William Faulkner” という項だけで 31 のエントリーがあり、これに作品の項目も足した数は、他の項目のエントリー数に比べて群を抜いて多い。
44. 1972 年に W. Percy とともに W. F. Buckley, Jr. のインタビューを受けたウェルティは、相方のパーシーとともに、「南部ルネッサンス」の枠はもう当てはまらないことや、70 年代に南部を書こうとした場合、以前とは異なり、南部が断片化して見えると述べている。Prenshaw, p. 96.
45. *American Literature* 誌の米文学史をめぐる議論は、以下の通りである。Annette Kolodny, “The Integrity of Memory: Creating a New Literary History of the United States,” 57 (1985), pp. 291-307; William C. Spengemann, “American Things / Literary Things: The Problem of American Literary History,” 57 (1985), pp. 456-81; Emory Elliott, “New Literary History: Past and Present,” 57 (1985), pp. 611-21; Sacvan Bercovitch, “American Canon and Context: Literary History in a Time of Dissensus,” 58 (1986), pp. 99-107. クレイリングについては注 33 を参照。